

イスラーム・ヴェール着用問題から考える 中央アジアの現在・過去・未来

帯谷 知可 (東南アジア地域研究研究所 准教授)



皆さん、おはようございます。ただ今ご紹介いただきました東南アジア地域研究研究所の帯谷と申します。

私のお話は、前の二つのご報告と大分趣が違うことになりましたけれども、どうぞしばらくおつき合ってくださいませようお願いいたします。

私が所属しております東南アジア地域研究研究所は、東南アジア研究の国際的な拠点ということでございますけれども、所内には非常に多様な研究者がおりまして、私自身も中央アジアのウズベキスタンという国を中心に中央アジア近現代史・地域研究を専門としております。

先ほどのご紹介にもありましたように、私は今からさかのぼること何十年も前のこと、多感な高校生だったころにシルクロードの歴史のロマンというのにはうっと惚れるようなところがございます。そこから大学でロシア語を学び、当時まだソ連があったわけですが、ソ連の中にも中央アジアがあるな、シルクロードの舞台だったところがあるな、ウズベキスタンやタジキスタン、トルクメニスタンがそうだな、と思ったりしました。それから、いろいろロシア史の勉強などをするうちに、ロシア革命の時期が、本当に激動の時代で興味深く、その時代の中央アジアの歴史に関心を持ち、地域研究をするようになりました。

地域研究といいますと、世界のいずれかの地域へ出かけて行って、その地域にどっぷりとつかりながら、その地域の中で起こっている問題というのを深く掘り下げていくということになりますが、それがひいては現代世界の中でどういう意味を持っているのかについて考える、そういうことを研究・検討することを通じて、自分たちの社会、あるいは日本について考えるということにもつながっていくのではないかと考えております。

研究対象地域、すなわちフィールドでさまざまな人々に出会ったり、さまざまな事象を目にしたりします。そうした中で、目からうるごとというような体験をするようなこともあります。そういった体験が研究トピックにつながっていくということも時に起こります。

きょうの私のお話も、そのようなものとしてお聞きいただければと思っております。

ウズベキスタンのイスラーム・ヴェールのお話をさせていただくわけですが、まず始めに、ウズベキスタンと、それからイスラーム・ヴェールについて、簡単にご紹介させていただきますと思います。

ウズベキスタンとは、今この地図にお示ししますように、周りをトルクメニスタン、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、それからアフガニスタンに囲まれた国です。アフガニスタンやイランの北側にあると考えていただくと、イメージしやすいかと思います。

このウズベキスタンという国は、地図で知らんになっていただくとよく分かるのですが、二重内陸国でありまして、隣のどこの国にも海がない国です。こうした国は、世界中でリヒテンシュタインとウズベキスタンしかありません。

ウズベキスタンは、1991年にソ連解体に伴って独立した新しい国です。その前身はといいますと、ソ連体制のもとで、ウズベク・ソヴィエト社会主義共和国が1924年からソ連解体の1991年まであったわけですね。ですので、ウズベキスタンとは、ソ連体制のもとでウズベク人という中央アジアのテュルク系の言葉を話す定住民が社会主義建設を行い、民族の自治を実現する領域という形でスタートした国でした。

ソ連解体以降は、ほかのかつてソ連であった国々と同様、政治的には民主化、経済的には市場経済化を進めることが重要な課題になっています。

現在の人口は、約3263万人で、非常に若年人口が多い国で、日本とは人口ピラミッドが逆さまになります。年々人口が増えております。中央アジアで最も人口の多い国です。その中で、ウズベク人が約8割を占めます。ウズベク人のほかにも、文化的な基盤にイスラームがある民族が幾つかあり、イスラーム教徒、つまりムスリムであることに着目しますと、個々人の信仰実践にはかなり濃淡があるとはいえ、人口の9割以上がムスリムだということになります。ただ、国の体制としては、世俗主義と政教分離がかなり徹底されております。

そして、現代ウズベキスタンを見る際に重要な観点として、まず社会主義がなくなった後、ソ連がなくなった後、どのような指針のもとで生きていくか、どのような国を築いていくかというような問題があるでしょう。それから、ソ連という体制がなくなった後も、やはり非常に大統領の権限が強く、民主化がなかなかうまくいかない、国家が強く社会が弱いというような権威主義体制の問題というのも深刻です。さらに、近年ますます顕著になっているイスラーム復興の諸現象にも着目すべきです。これら三つが重なり合うような磁場で、いろいろな問題が生じてきているのではないかと考えております。



- 1991ソ連解体に伴って独立
ー前身はウズベク・ソヴィエト社会主義共和国(1924-1991)
独立後の課題＝民主化と市場経済化
- 人口 約3263万(2019)
ウズベク人が約80% 人口の90%以上が「ムスリム」
世俗主義・政教分離
- 現代ウズベキスタンへの関心・・・
 - ポスト社会主義
 - 権威主義
 - イスラーム復興
 - サッカー
 - シルクロード
 - ウズベク料理

ただ、一般の皆さんに、ウズベキスタンにより関心を持っていただく入り口としては、例えばサッカーですね。サッカーのアジア大会には、ウズベキスタンは常連の強国の一つとして、毎年のように登場しています。



もう一つは、私の高校時代に関心にも表れていましたように、シルクロードでしょう。ウズベキスタンと聞いて、ぴんとこない方でも、サマルカンドやブハラといった歴史的な都市の名前はよくご存じだという方は案外いらっしゃるのではないのでしょうか。



それから、ウズベク料理もあげておきた

いですね。最近では現地でも日本でも、ブログなどでウズベキスタンの民族料理の紹介をする人が大変増えております。

ウズベキスタンの一般的なイメージを少し写真でご紹介しましょう。まず世界遺産になっているサマルカンドのレジスタン広場、こちらの写真は「ノン」と呼ばれる丸い平型パン・インド料理のナンは皆さんご存じだと思いますが、言葉としてはそれと同じです。こちらの写真は羊肉・ニンジン・タマネギ・スパイスなどを入れて炊いたピラフです。ピラフは代表的な料理でもあり、2016年にユネスコの世界無形遺産にも指定されています。

また、シルクロードということと言いますと、この地図に赤い線で示されているのがシルクロードで、東は中国から西はイランあたりまでが、この地図に入っています。ウズベキスタンの領域というのは、これはあくまでイメージをつかんでいただくためということですが、大体この円で囲まれたあたりということになります。

さて、本題に入ります。イスラーム・ヴェールとは、皆さんにとって、あまりなじみのあるテーマではないだろうと思います。ムスリムの女性がつけるスカーフ、または頭覆い、場合によっては顔まで、あるいは全身を覆うこともあります。そうしたものが一般的に「イスラーム・ヴェール」と総称されています。

「ヒジャブ」という言葉もよく知られているかと思いますが、これはもともと「覆い」「仕切り」というような意味のアラビア語です。

このスカーフや頭覆い、顔覆いは、個別にはさまざまなバリエーションがあり、いろいろな名称のものがあります。国や地域によってスタイルも違いますし、名称も異なります。

なぜムスリム女性がヴェールをつけるかといいますと、その根拠はイスラームの聖典ク

ルアーン(コーラン)や預言者ムハンマドの言行録ハディースなど、イスラームで道徳や規範の源泉とみなされるものの中に、次のような文言があることに求められます。

例えば、クルアーンの第24章31節には、「女の信仰者たちに言え、彼女らの目を伏せ、陰部を守るようにと、また、彼女らの装飾は、外にあらわれたもの以外は表にあらわしてはならない。」とあります。

ハディースでは、「成人に達した女性は、ここを除き、どの部分も見られてはならないと
いって、預言者は顔と手を示された」などがあります。

ここで言われているのは、女性の美しさはいたずらに男性を魅惑してしまうので、それを避けるために、女性は美しいところを隠すように、ということです。

しばしば、ハディースでは「預言者は顔と手を示された」とあることから、頭や顔を覆うとともに、手先まで見せないようにする習慣のあるところもあります。エジプトなどでは、スカーフをつけることと手袋をすることがセットになって考えられているケースもあるそうです。

さて、19世紀になりますと、ヨーロッパの強国による中東イスラーム地域の植民地化が進んでいきます。その中で、植民地支配の推進者たちは、同じく19世紀のヨーロッパで勃興したフェミニズムの言語を非常に巧みに取り入れて、「イスラームは本質的に女性を抑圧する、遅れた文化である」「女性が男性によって強制されているヴェールは、その後進性の象徴なのだ」というような見方や言説を作り上げ、それが一部の人々に深く浸透していく経緯があったことが指摘されています。

やがて、こうした言説は、固定観念のような形で、ヨーロッパだけではなく、植民地側の知識人たちにも浸透していき、ヨーロッパ化という形の近代化を求める運動にも結びついていったことが、これまでの研究で明らかになっています。

このような見方は、実は20世紀中にもいろいろな形で、少しずつ変化しながら、現代に至るまでかなり維持されている側面があるのではないかとすることも指摘できるかもしれません。

世界の各地で、イスラーム・ヴェールをめぐる問題は見られます。例えば、世俗主義と信仰の自由・服装の自由が衝突して、世俗主義の原則からヴェール着用が禁止されるというようなことが起こっています。フランスやドイツやトルコなどで、こうした現象が起こっています。フランスでは、北アフリカに出自を持つムスリムの女子学生たちがスカーフをつけて学校に通っていたところ、それを認めない学校側から放校処分を受けたことから議論が拡大して問題が先鋭化していき、最終的にはスカーフ禁止法、ヴェール禁止法の制定にいたり、公の場でムスリム女性がスカーフ等の覆いを着用することが法律で禁止されるということになりました。ドイツでも、同様の状況が見られます。

イギリスは逆に、自由主義的な見地からヴェール着用を認めています。例えば、裁判の証人になるときに、女性がヴェールをつけて顔を見せずにいたならば、どうやって本人

確認をしたらいいかというようなことが問題になっています。

あるいは、エジプトやトルコでは一トルコは先ほども出てきましたがまた別の事例として、ヴェールの再着用とムスリム女性の生き方の選択が結びつき、ヨーロッパ化という近代化を経た後に、いったんヴェールをつけなくなった女性たちが、1980年代ごろから、再びヴェールをつけるという現象が非常に顕著になったことが観察されています。それはムスリム女性の一人一人が、あらためて自分が何者であるか、自分はどのように生きるべきかについて考えた末に、ヴェールを着用するという主体的な選択をしたのだと理解されています。

さらに、インドネシアやアメリカなどでは、イスラーム・ファッションとして、ヴェールが非常に華やかなものになっているという現象も認められますし、イランやアフガニスタンなど、国家的な規範として女性がヴェールを着用しなければならない国々では、これはまた非常に逆説的でもあります。ヴェールさえつけていれば女性は社会進出ができ、男性と同じように仕事もできる、だからヴェールは女性に自由を与えてくれるものだ、という主張する女性たちも見られます。従って、現代世界の中でヴェール問題は非常に多様な形で存在しているのです。

それでは、ウズベキスタンでは、それはどういう形で展開しているのか、お示ししていきたいと思います。

私がこの問題に関心を持つきっかけになったのが、この1枚の写真です。これは、私自身が2009年に撮影したのですが、それまで、ほぼ20年ほど私は毎年ウズベキスタンに行っていましたが、このとき初めて、この写真の向かって左側半分に写っているような、スカーフをつけ、ゆったりとした、手足を露出しない長い丈の衣服をつけた女性たちが、後から後から通りを歩いてくるという状況に遭遇したのです。

その時私は、それまで自分が見たことのないようなウズベキスタンの風景が突然目の前にあらわれたような、ある種のショックを受けたような気持ちになりました。これをきっかけに、ヴェールの問題をいろいろ掘り下げていくことになったのですが、いろいろ調べてみると、実はそれまで私が



20年ほどの間見ていた、全くスカーフをつけない女性ばかりがいるウズベキスタンの風景というのは、ソ連時代にかなり徹底したヴェール根絶運動が行われた結果だったのだということが分かってきました。

それでは、ウズベキスタンの伝統的なヴェールとは、元々どういうものだったのでしょうか。ここでまた歴史的な、古い写真を1枚お見せします。ぱっと見ただけでは、これが何だかよくお分かりにならないかもしれません。これは、2人の女性が皆さんのほうに向かって歩いてきているところです。分厚いコートのような長い上着をすっぽり頭からかぶっています。それから、顔の前には、馬の毛で編んだ黒いすだれといいますが、ネットのようなものをつけています。こういう形で全身を覆う姿で、ウズベキスタンの女性たちは外出していました。

このコート状の長い上着のことをパランジといいます。それから顔につけている、馬毛のネットはチムマトあるいはチャチヴォンと呼ばれます。

ヴェールの中がどういうふうになっているか、これらの写真をご覧ください。左側と真ん中の写真は、顔の前のネットを上にあげた姿です。パランジとチャチヴォン両方を取ると、この右側の写真のように、その中にもさらにスカーフをつけています。

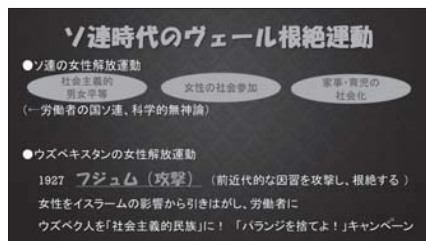
ウズベキスタンのある地域についての古い民族誌などを読んでみますと、女性はまず朝起きたらすぐに、大判のスカーフを頭にふんわりとのせ、室内でもそのスカーフを常につけていたと出てきます。外出するときには、この右側の写真ですと、ちょっと帽子のように見えますが、上から別のスカーフをつけ、さらにその上からパランジをつけたと出てくるわけです。伝統的なイスラーム・ヴェールとは、こうした形のものだったわけですね。

これがソ連時代になりますと、1920年代に全ソ連的な規模で女性解放運動が展開されます。これは、社会主義的な男女平等、女性の社会参加促進、さらに、これは家事・育児の社会化という、この三つをスローガンとして掲げたものでした。

1920年代といえますと、1926年が大正から昭和への変わり目ですので、この頃の日本はどうだったのかと考えますと、家事・育児の社会化などは、たいへん画期的な目標だったのではないかと思います。

ソ連は、基本的に財産を持たない労働者の国として建設されましたから、男性も女性も労働者になることがうたわれましたし、また科学的無神論という非常に強いイデオロギーもありました。宗教は、イスラームだけではなく全て、好ましくないもの、近代的でないもの、科学的でないものとして、奨励しない、あるいは禁止や弾圧の対象になりました。

この運動は、ウズベキスタンにも波及しました。女性解放運動のウズベキスタン・パー



ジョンですね。1927年には、それは「フジユム」(「攻撃」という意味のウズベク語)の名のもと、女性解放のための一大キャンペーンが行われることになります。

これは、前近代的なあらゆる悪しき慣習を攻撃して根絶するぞという、非常に勇ましいスローガンでした。女性を何とかイスラームの影響から引き剥がして、家の中から、社会の中へと導き、そして労働者にすることが、ソヴィエト政権にとっては、非常に重要な課題であったといわれています。

そして、ウズベク人を、ヴェールをつけた女性がいらないような「ソヴィエト的」で「近代的」な民族に改造してこそ、社会主義建設を担えるのだという考えのもと、「バランジを捨てよ」という、大規模なキャンペーンが1927年に行われました。町の広場などに女性たちを集め、彼女たちがつけているバランジを一齐に脱がせて、みんなでそれを火にくべるといふパフォーマンスが国中で行われました。

例えば、ソ連時代の近代的な女性像や根絶すべきヴェールをめぐる言説として、ウズベク人女性は体を清潔に保ち、適度に日光に当たり、運動をして健康になり、文化的で教養ある存在とならねばならない、とされました。それによって新しいソビエト社会を築いていく、健康で丈夫な子どもを産み育て、ウズベク民族を再生産することが可能になる、と。

あるいは、バランジは新鮮な空気と日光から女性を遮断しており、それを着用するような女性は、筋力も弱く老化が早く不健康であり、そのような女性から生まれた子どももまた健康ではあり得ない、あるいはバランジは、時として不道徳な行いに女性を追いやる、暗黒と抑圧と無知の象徴であり、無垢な女性たちが閉じ込められている牢獄である、女性はそこから解放されねばならない、というようなことが、公式のメディアで盛んに宣伝されたわけです。

一方、それではヴェールを着用しないとしたら、女性は外出の際に何を着たらいいのかということも問題になりました。それから、ソヴィエト的な生活の中で女性たちに奨励されたのは、読み書きがきちんとできるようになり、男女共学のソヴィエト学校でしっかり教育を受け、スポーツにもいそいで、強靱な体、健康な体をつくり、国防にも貢献することでした。さらに、さまざまな人生儀礼は、非イスラーム的なものに、ソヴィエト的なものに姿を変えていきました。

やがて、ソ連全体では、男女平等や女性の社会進出の問題は、「女性問題」というカテゴリーで語られるようになり、女性問題の解決は数字でもって女性の識字率の向上

ソヴィエト的言説の例

- ウズベク人女性は身体を清潔に保ち、適度に日光に当たり、運動をして健康になり、文化的で教養ある存在とならねばならない。それによってこそ新ソヴィエト社会を築いていく健康で丈夫な子どもを産み育て、ウズベク民族を再生産することが可能になる。
- バランジは、新鮮な空気と日光から女性を遮断しており、それを着用するような女性は筋力も弱く、老化が早く、不健康であり、そのような女性から生まれた子どももまた健康ではあり得ない。
- バランジは時として不道徳な行いに女性を追いやる暗黒と抑圧と無知の象徴であり、無垢な女性たちが閉じ込められている牢獄である。女性はそこから解放されねばならない。

*ソヴィエト的女性解放の理想と現実 何を着るべきか:

- 洋装
- クイナク(ワンピース)+イシュタン(ズボン)+ルモル(ヘッドスカーフ)
- 伝統的日常生活は残存
- ソヴェト的生活
- 識字、教育(男女共学)、スポーツ、非イスラーム的人生儀礼
- 女性問題
- 数字に見る女性の識字率や労働者女性比率
- 成果のなかで
- 隠されたジェンダー格差、女性の二重苦・三重苦

や、労働者中の女性の割合の増加を示すことでその成果とされました。ただし、実は隠されたジェンダー格差がソ連時代にもずっとあったことが近年の研究で明らかにされています。例えば、労働者の国ですので、生産部門の賃金は非生産部門より高く、教師や医師など肉体的労働でない分野の職業にはやはり女性が多かったので、その部門間の賃金格差が結局はジェンダー間の賃金格差になっていたり、あるいはソヴィエトの女性はフルタイム労働をし、さらに家に帰れば実質的に家事・育児のすべてを担っており、二重苦・三重苦の状態にあっけいつも疲れ果てていたというようなことがわかってきました。

女性解放運動が推進された当時のウズベキスタンの新聞等のビジュアル資料をいくつかをお見せしたいと思います。

これは1927年、女性解放キャンペーンが始まった3月8日の新聞『赤きウズベキスタン』です。3月8日は国際婦人デーで、社会主義諸国では非常に重要な意味を持ち、今も市民の間で祝われている祝日ですが、この日の新聞の第1面には、今ごろんにいれているようなイラストが描かれています。パラソルをはらりと脱いで、足元に捨てた女性が雲の向こうの太陽のほうへ、つまり新しい生活、明るい世界へと手を差し伸べて、希望を表明しているようなイラストです。



ちなみに、これはソヴィエトのポスターとして非常に有名な、「十月革命は女性労働者と農夫に何をたらしたか」というロシアでつくられたポスターととてもよく似ています。女性が丘のような高いところに立って、太陽の光が差す中、眼下にソヴィエト政権が女性のために建設した、図書館ですとか女性クラブですとか、そういう施設が描かれているんですね。これとほぼ同じようなイラストがウズベキスタンの新聞にも掲載されたことが確認できます。

次に、同じく1927年の3月8日の別の新聞『東方のコムソモール員』では、「東洋の女子たちにもっと門戸を開こう」というタイトルの記事が出ています。中央部分には「ヴェールを捨てよ、それは君を世界から閉ざし、君の健康を損ない、労働を邪魔するものだ」と書いてあります。さらに、ページ下のイラストを見ますと、理想とされた女性像ということでしょうか、工場で働く女性、本を読む女性、家で子供を抱きながら家事・育児をする女性が描かれています。労働と知識と家事・育児、非常にたくさんのものが同時にウズベク人女性に求められていたということがわかります。



次のビジュアル資料は、ソヴィエト的・近代的な世界と、非ソヴィエト的・前近代的な世界がくっきりと二項対立的に表されているものです。『マシュラブ』という、中央アジアで発刊されていた共産党系新聞の付録誌の表紙です。表紙の絵の中央には日めくりカレンダーが、3月8日の国際婦人デーを示しています。そこに向かって、ヴェールを着用せず顔をあらわにした女性たちが赤旗を掲げ、画面の奥からずんずんと歩いてきていますね。手前の部分では、白いターバンを巻いた2匹の犬が3月8日のカレンダーにかみつこうとしています。

この犬は、実はイスラーム知識人を表しているのです。白いターバンは、ウラマーなどのイスラーム知識人を象徴しています。犬というのは、実はイスラームでは非常に不浄な動物とされますので、ムスリムにとっては、これは非常に失礼な図柄になるのですね。その2匹のターバンを巻いた犬の周りにはクルアーンや、鎖とかムチ、それからバランジとチムマトが散らばっており、イスラーム知識人男性が女性解放を象徴する3月8日にかみついていると、そういう図になっているわけです。

画面の奥のほうには、真っ黒なシルエットでモスクなどのイスラーム建築が見えています。ですから、近代的な世界として、赤旗とか、行動する女性、前進する女性、顔を出している女性が描かれ、それに対して、前近代的な世界として、ターバンとか、クルアーンとか、鎖とか、ムチがイスラームと家父長制に固執する男性の象徴として描かれているのです。

こちらも同様に、『マシュラブ』の表紙ですが、画面の右と左でそういった対比になっています。明るく陽の指した知識の宮殿にレーニンの肖像が掲げられていますが、そこに顔を出した女性がヴェールをつけた大勢の女性たちをいぎなっています。その階段を上っていけば、女性たちはすばらしい知識の宮殿に到達できるということを表したものです。

次に、これは「バランジなしで」という題のついた絵です。これも非常にメタファーに富んだ絵で、バランジを着けていない若い女性が非常にきりっとした表情で、ずんずんと前に進んでいく様子を描いています。その後ろのほうには、バランジを着けた女性が2人じっと立たずんでいます。そうすると、これは前進と停滞、進歩と後進



を、バランジの有無になぞらえて、非常に対比的に描いたものだと言えるでしょう。バランジを着けていない女性は、伝統的な女性の装いとは異なる洋装とショートカットで、活動的であることが見てとれ、本やノートを抱えて知識を求めて前に進んでいるという感じがします。この女性は赤いネッカチーフをしています。これはコムソモール(共産主義青年同盟)に所属していることを示すものです。こういうような形で、近代的なものと、そうでないものが、バランジの有無と絡めて描かれたということですね。

次に、ヴェールが放棄されていく過程を歴史写真で紙芝居風にお見せしましょう。これは女性向けの識字教室の様子ですが、こういうところに通った女性たちは、勉強するときには、チャチヴォンを上げなければなりません。識字教室のロシア人女性教師などが、だんだんに「バランジを取りましょう」と教化していきました。

次の写真では、バランジをつけている人とつけていない人が半々ぐらいですが、その次の写真になりますと、もうバランジをつけている人は一人もいなくて、ほぼ全員が白い大判のスカーフを頭に載せるようなスタイルで着用しています。ここでは、「バランジ根絶」、「バランジは封建制の遺物」というようなスローガンが掲げられています。

日常の服装ということでは、ソ連時代を通じて洋装化が進み、例えばこの左の写真のように、80年代の首都タシュケントの女性たちは、ウズベキスタンの特産品である、華やかな色柄の絹緞生地のワンピースを着て、腕や足を出すようなスタイルで歩くようになっていましたし、右の写真は独立後の1999年に私が撮ったものですが、



「ブロードウェイ」と呼ばれる、一番おしゃれな若者が集まる通りでは、私たちと変わらない、めいめいにおしゃれな洋装をするようになっていました。

その一方で、冒頭にお見せしましたように、イスラーム式の服装をする女性たちが徐々に増えてきました。このようなスタイルは、バランジやチムマトとも異なる新しいヴェールであり、現代ウズベク語で「ヒジョブ」と呼ばれます。先ほどのアラビア語のヒジャーブから来ているのですが、ウズベク語では、ヒジョブとなります。そして、この新しいヴェールを、ウズベキスタン政権はかなり厳しく統制する、弾圧するということになっていくのです。

その背景としては、パレストロイカ以降のイスラーム復興の波の中から、幾つか過激主義的な組織の活動がウズベキスタンで見られるようになり、イスラーム過激主義に対する警戒が、非常に強権的な体制のもとで、過度なまでに表明されるようになったことがあります。そこには、ソ連時代に徹底的に世俗化が行われて、そのもとで生まれたメンタリティーを現代のウズベキスタンの為政者たちも継承している側面もあるかと思います。

政権側は、今度は、ヴェールをよいヴェールと悪いヴェールに分け、よいヴェールとは、ウズベキスタンの女性たちが昔からつけている伝統的で控え目な、ルモルというスカーフだということを言います。それに対して、新しいヴェールであるヒジョブは、過激主義に結びつくかもしれない外来の悪いヴェールだと。

例えば、政権側につくあるイスラーム知識人が、外国の装いはウズベキスタンにとって危険な外国のイデオロギーをもたらす、アラブ風のスカーフは非常に問題である、イス

ラーム的アイデンティティーはアラブから輸入するのではなくウズベキスタンの伝統の復活により醸成しなければいけないなどと発言しています。あるいは、国内の宗教を監督している国家宗教問題委員会の女性委員が、ヒジョブのような服装は宗教的過激主義者のものであり、その下には銃を隠し持っているかもしれないではないか、と述べたことも伝えられています。

こうした形で、ヴェールは目に見えて統制されていくことになるのですが、その根拠になっているのが、1998年に制定された「信教の自由と宗教組織に関する法」という法律です。これは明らかにイスラーム過激主義対策として制定された法律だといわれていますが、その中に「礼拝用の衣服で公の場に姿をあらわしてはいけない」という項目があるのです。これにヒジョブが該当するというのでヒジョブ禁止につながるわけですが、その契機になったのは、2004年に、ウズベキスタンで初めて生じた、女性による自爆テロ事件だったようです。この事件はウズベキスタンにとってたいへんショッキングなことでした。事件後、ある地方自治体の長が、これ以降、スカーフをつけている女性は着用の理由を問わずに、問答無用で過激主義者とみなすと発言したことが伝えられています。それが、やがて国中で共有されることとなり、ヴェールへの統制が目に見えて強くなっていったという経緯があったようです。2015年には、警察がバザールに入って、ヒジョブを販売している人、着用している人たちを大々的に摘発するというような事態になってしまいました。

一方で、女性たちはなぜヒジョブをつけるようになったのでしょうか。いくつかの情報を総合すると、よりよいムスリムとして生きるため、●家族からの要請や圧力？ ●勧めかけ？ ●規範内での新しいおしゃれ？ ●映画やドラマの影響？ といった理由が見られ

現代ウズベキスタンの「ヴェール問題」

新しいヴェール「ヒジョブ」

- 1999 初の爆弾テロ事件
- ウズベキスタンイスラーム運動などの脅威
- 2001 9.11事件後の対米協力
- アフガン空爆への協力
- 2005 アンティジャン事件
- 権威主義体制のもとでのイスラーム過激主義への警戒



- よいヴェール（ルモル）／悪いヴェール（ヒジョブ）
- ルモル＝伝統的で控えめなスカーフ
- ヒジョブ＝外来の、スカーフを含むトータルな「イスラーム式服装」

「外国の服はウズベキスタンにとって危険な外国のイデオロギーをもたらす。...アフガンスカーフはウズベク人女性に人気があるがゆえに特に問題。イスラーム的アイデンティティはアラブから輸入するのではなく、ウズベキスタンの伝統の復活により醸成されるべき」(タシュケント中央モスクのイマーム、2009年)

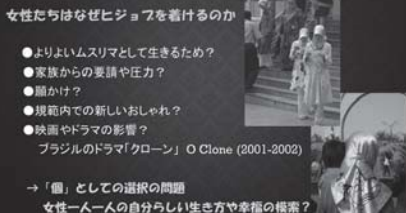
「そのような服装(ヒジョブ)は宗教的過激主義者の女性たちのもの...ヴェールの下に銃を隠し持っているかもしれない」(宗教問題委員会の女性委員、2009年)

- 1998 「信教の自由と宗教組織に関する法」
- 一第14条 「ウズベキスタン国民は礼拝用の衣服で公の場に姿を現してはならない」
- 2004 国内で初めて女性による自爆テロ →ヴェール＝過激主義！
- 2009 バザールで警察が礼拝用衣服着用の禁止と罰則について告知
- 2012 店舗やバザールにおける宗教的衣類の販売禁止
- 2014 ヒジョブの販売者・着用者への統制強化
- 2015 警察によるヒジョブ販売者・着用者の摘発
- 「今すぐヒジョブを脱ぐか、対テロ部門で尋問か、どちらを選ぶ？」

女性たちはなぜヒジョブを着けるのか

- よりよいムスリムとして生きるため？
- 家族からの要請や圧力？
- 勧めかけ？
- 規範内での新しいおしゃれ？
- 映画やドラマの影響？
- ブラジルのドラマ「クローン」 O Clone (2001-2002)

→「個」としての道徳の問題
女性一人一人の自分らしい生き方や幸福の模索？



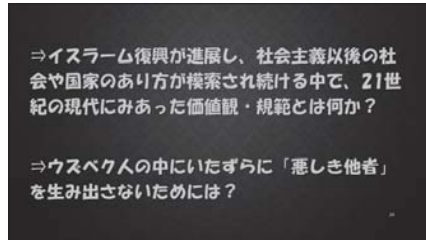
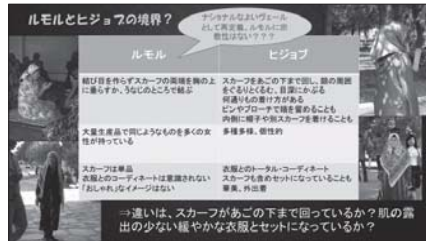
るようです。さらには、例えば「クローン」というブラジルのテレビ・ドラマのように、外国の映画やドラマの影響で、美しい女優が演じるヴェールをつけたムスリム女性のヒロインに憧れて、というようなことも実際に中央アジアであったとのこと。従って、女性たちは、やはり個々に一人の女性として、ヴェールをつけることを選択しているのであって、自分らしい生き方や幸福な人生を模索する過程で、ヴェールをつけるようになったということに注意を向けるべきではないかと思えます。

よいヴェールと悪いヴェールの境界とは何かといえば、これについては政権の側は両者の線引きをしよう、それを説明しようと思念なわけですが、実は違いは何かといわれたら、スカーフを顎の下まで回して顔をくるむように結ぶかどうかということ、全体的に緩やかな露出のない服装をするかどうかにあるということになるかと思えます。

ルモルのほうは、ナショナルな、よいヴェールとして再定義される状況になりますが、よいヴェールであるためには「礼拝用の衣服」に該当しないことを明確にする必要があることから、ルモルには果たしてもともと宗教性があるのか、ないのかということが今度は議論になっています。

ここで見てきたウズベキスタンにおけるヴェール問題は、イスラーム復興が進展しつつ、社会主義がなくなった後の社会や国家のあり方が模索される中で、21世紀の現代に見合った価値観や規範をどこに求めるべきかという問いを投げかけていると思います。ヒジョブをつけた女性に無条件に過激主義者というレッテルを張ってしまうのは、それによって、ウズベク人の中に「悪しき他者」をいたずらにつくり出すことにつながりかねず、独立後の国民統合のあり方からしても健全とは思えません。そうならないためにはどうしたよいかという問いも、そこに含まれていると思います。これは現地の人々にとっても、ウズベキスタンを研究する私たちにとっても重要な問いでしょう。最近では、日本でもこうしたスカーフをつけるムスリム女性の姿は、よく見られるようになってきていると思いますので、私たち自身も身近な問題として考えてみるべきだという側面もあるかと思えます。

2016年にウズベキスタンでは政権交代がありました。四半世紀以上にわたって権勢をふるった初代大統領が亡くなり、新政権が誕生しました。新体制のもとでは、徐々に自由



化が進む兆しが見えてきておりまして、ヴェールに対する統制も以前に比べれば緩んできているようです。ヒジョブを着用した女性たちが静かに声を上げ始めているような状況も観察できます。

そのような例として、この写真は、2017年、初めてウズベキスタンのデザイナーがドバイで開催されたイスラーム・ファッションショーに出した作品です。髪の毛はきっちりターバン風の頭覆いで包んでいますが、顎の部分はくるんでいませんので、やはり政権に対して少し忖度があるのかなと思っています。あるいは、町の大型スーパーマーケットで、顎までくるんだようなスタイルのスカーフ着用を含むイスラーム・ファッションのショーが公然と行われたことも伝えられています。今後もこうした変化に注目しながら、さまざまな女性たちの声に耳を傾けていきたいと思っております。

どうもご清聴ありがとうございました。

